

# PROGRAM NOTE

2021年5月

## 『アンデスの声』あの日あの頃 聞き手 永野正和(京都)



1964年、東京オリンピックの年に「アンデスの声」が南米向けに放送開始された頃、日本人秘書第一号として働かれていた川崎慶子（旧姓田辺）さんを関西空港近くの自宅に訪ねていろいろとお話しをお伺いしました。（写真左）

「私たち家族は父がエクアドルで開拓農園を始めていたので、1968年に貨客船で太平洋を横断して南米へ渡りました。港には椰子の木ばかりで農園に着くと床上式の木造家屋。ディーゼル発電で夜は過ごしていました。若い娘がひとりでこんなところにいるのは可哀想だと、私を首都のキトにいる尾崎さんにお願いして住み込みで、仕事もHCJBで働くようにしてくださったのです。放送局までは歩いて4、5分のところだったので毎朝ご夫妻と一緒に出かけました。まず、びっくりしたのは、放送を聞いてこんなにも沢山の人から手紙が寄せられるのかということでした。机の上に山と積まれた手紙の片付けを私も手伝わせてもらいましたが、放送は一年中休みのない大変な仕事だと思いました。

とくにBCLブームの時には日本からの手紙が郵便袋いっぱいに届きました。受信報告書はきちんと書かれていて返信は間違いないように気を使いました。そのうち筆跡だけで誰からかがわかるようになりました。同封された絵葉書やしおりなどは、南米のリスナーにも分けてあげ喜ばれました。

番組にも出演させてもらいました。人気番組は何と言っても「お便り交換の時間」でした。南米各地で活躍しておられる家族同志が情報を確かめ合ったり、プレゼント曲を贈りあったりできたからでしょう。当時は生放送だったので、尾崎さんが入院した時は大変でした。番組が予想より早く終わりそうになった時は久子さんから「お別れの言葉と手紙の宛先は2回くりかえしてお別れの言葉もゆっくり時間まで伸ばしましょう」と言われ、放送が終わった時にはストップウォッチを持つ手が冷汗でびっしょりでした。

HCJB放送局内の雰囲気は国連のようでした。世界各国から人材が集められ「放送」という同じ目的に向かって、違いを超えて和気あいあいと協力し合っている姿は素晴らしいと思いました。も日本語部と隣あわせはドイツ語部、向いは北欧3カ国語部、別棟には、英語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、ケチュア語、各部のオフィスがありました。多感な青春時代の真ん中の時間をHCJBという異文化世界でいろいろなことを学びながら過ごせたことは、私にとってかけがえのない貴重な体験となりました。とくに久子さんが、家では3人の子供たちの母親として、オフィスやスタジオではご主人の片腕として懸命に尽くしておられる姿から多くを学んだと思います。



田辺慶子&尾崎久子

日本にもどった時に山田耕嗣さんから関西のある放送局にアナウンサーとして紹介したいという話があったのですが、帰国後は結婚して主人の仕事の関係であちこちと移動したので就職は無理でした。弟の正裕のバナナ農園も順調で、エクアドル生まれの洋樹も加わり、それに在留邦人の実業家内田さんの長女直ちゃんの若手家族も加わって、これからも有機栽培で栄養価の高い、美味しいバナナを日本の皆様に提供し続けてくれるものと大いに期待しているところです。

HCJB 日本語放送46周年記念番組より（2010年5月1日放送）

### サタデー・トーク

### バイブル・トーク

きき手 尾崎一夫 每週土曜日放送		淀橋教会 峯野龍弘主管牧師 每週日曜日放送	
5月1日	川崎慶子（旧姓田辺）さんに聞く（1） 永野正和	5月2日	聖書遊覧バス：ヤコブの梯子
5月8日	川崎慶子（旧姓田辺）さんに聞く（2） 永野正和	5月9日	短波の母 <みんなの茶の間 NHK制作>
5月15日	<エクアドルにアンデスの声を見た> フジテレビ取材	5月16日	リスナーからの「お便り交換の時間」
5月22日	HCJBリスナーの集い（ラジオ短波スタジオにて）	5月23日	聖書遊覧バス：ヤコブの結婚
5月29日	36年こころの軌跡（ラジオ短波制作番組）	5月30日	聖書遊覧バス：ヤコブの子供たち

放送後の番組は、ホームページ(<http://japanese.reachbeyond.jp>)のトップページ左側メニューにある『インターネット放送』のリンクページからお聴きいただけます。（mp3形式）

放送時間：日本時間 午前7時半~8時 15410kHz （再放送） 午後8時~8時30分 15.565kHz  
(米国アリゾナ州制作／オーストラリア送信)

\*受信報告書をメールで送る場合：[hcjbjapan.office@gmail.com](mailto:hcjbjapan.office@gmail.com)

